とある名探偵と助手のラブコメ的日常@『探偵はもう、死んでいる。』

二語十

目　次

とある名探偵と助手のラブコメ的日常@『探偵はもう、死んでいる。』
本編
- 出会い
- きっかけ
- 探偵観
- 助手
- 昔の男
- コードネーム
- 年齢不詳
- 歳下
- 力関係
- 攻守逆転
- 潜入捜査
- 暇つぶし
- 迷子猫
- ペット
- 依頼
- 給料
- 飴と鞭
- 茶番
- 気安さ
- 関係性
- パートナー
- 彼女
- ラブコメ
- 恋愛指南
- 笑顔
- 本物

もしも
看病
脱衣
喧嘩
和解
提案
夢の国
ギャップ
待機列
絶叫マシン
パレード
帰り道
お土産
密着24時
理想
現実
泥仕合
阿吽
解決
詐欺
お風呂
バスタオル
夜食
就寝
おまけ　シュレディンガーの猫
イベント編
クリスマス①
クリスマス②
クリスマス③
クリスマス④

クリスマス⑤
大晦日①
大晦日②
大晦日③
大晦日④
大晦日⑤
賀正
バレンタイン①
バレンタイン②
バレンタイン③
バレンタイン④
ホワイトデー①
ホワイトデー②
ホワイトデー③
ホワイトデー④
ホワイトデー⑤
誕生日①
誕生日②
誕生日③
誕生日④
誕生日⑤
七夕①
七夕②
七夕③
七夕④
七夕⑤

あらすじ：

名探偵・シエスタ（クール美少女）と、その助手・君塚（巻き込まれ型少年）が繰り広げる、毎話10秒で読める会話だけのショートストーリー。

シ「」

君「」

の形式でひたすら進んでいきます。

＊この作品は、ＭＦ文庫Ｊより発売中の『探偵はもう、死んでいる』（著：二語十、絵：うみぼうず）の登場キャラクターであるシエスタと君塚による、スピンオフ的なＳＳです。

＝＝＝

『探偵はもう、死んでいる』あらすじ

「君、私の助手になってよ」

俺がはじめて「シエスタ」に出逢ったのは、地上遙か一万メートルの空の上だった。

自称名探偵の、白髪の少女――そんな彼女に巻き込まれる形で、俺は世界放浪の旅へ出た。

「いい？　助手が蜂の巣にされている間に私が敵の首を取る」

「おい名探偵、俺の死が前提となっているプランを立てるな」

そんな軽口も交わすようになった俺たちは、それから三年もの間、目も眩むような冒険劇を繰り広げ――やがて、死に別れた。

そして、人生を終えた俺は、再び日常という名のぬるま湯に浸っている。

なに、それでいいのかって？

いいや、誰に迷惑をかけているわけでもない。

だってそうだろ？

探偵はもう、死んでいる。

掲載ページ：

https://kakuyomu.jp/works/16773540548916317774

とある名探偵と助手のラブコメ的日常@『探偵はもう、死んでいる。』

本編

プロフィール

出会い

君「物語では空から女の子が降ってくるのが定番だが、俺たちはその空の上で出会ったんだよな」

シ「あの時は、君とこんなに長く旅を続けることになるとは思わなかったよ」

君「もう三年近くになるのか」

シ「今では君も一人でトイレができるようになって……」

君「俺は何歳の設定だ」

きっかけ

君「シエスタはいつから探偵をやってるんだ？」

シ「うーん、これはまだ私がこの世のすべてを手に入れる前の話なんだけど」

君「今のお前はこの世のすべてを手に入れてるの？」

シ「物心がついた頃――この大探偵時代が始まる前には、もう探偵を名乗ってたかな」

君「知らない世界観！」

探偵観

シ「これは……私が実際にテロリスト集団を壊滅させたときの話です……」

君「こんな本怖は嫌だ……探偵のイメージがさらに遠のくぞ」

シ「とは言え私たちの場合、敵とドンパチやることも多いからね」

君「それで探偵を名乗っていいものか？」

シ「私は〝依頼人の利益を守る〟のが探偵だと思ってるよ」

助手

シ「そもそも論として、助手って……必要？」

君「理不尽だ……最初に誘ってきたのはお前の方だからな」

シ「女の子に声を掛けられたからって、ひょいひょいついてくるのはどうかと」

君「おま、本当、一回ちょっと、ほんと……」

シ「ふふ、楽しいね」

君「どこが！？！？」

昔の男

君「そういえば、俺の前にも、他に相棒とかいたのか？」

シ「ん、ジャッカルのこと？」

君「なんだそのカッコいい名前！　……てかマジでいたのか」

シ「嫉妬？」

君「っ、アホか」

シ「まあジャッカルっていうのは、私が愛用してるマスケット銃につけてる名前だけど。……ところで嫉妬？」

君「だから違う！」

コードネーム

君「そろそろ俺もただの助手じゃなくて、ジャッカル……もとい、『シエスタ』みたいなコードネームがあってもいいと思うんだが」

シ「ふん！　助手っていうのかい？　贅沢な名前だねぇ！　今からお前は手だ！　いいかい、手だよ！」

君「相方のキャラが神隠しにあっている……」

年齢不詳

シ「君が一人でトイレができなかった頃の話だけど」
君「だからそんな時期は存在しない！」
シ「小さい頃はそうだったでしょ」
君「そりゃそうだが、その時期の俺をお前は知らんだろ」
シ「え、君のおしめを取り替えてたの、誰だと思ってるの？」
君「お前こそ何歳設定だ！」

歳下

君「実際シエスタって幾つなんだ？」

シ「何歳に見える？」

君「面倒臭い質問……まあ俺と同じぐらいか少し上、一七、一八とかだと思ってるが」

シ「歳下だとは思わないんだ」

君「歳下にバカにされてると考えると俺の心がもたないから、せめて歳上であってくれと祈っている」

シ「面白すぎる」

力関係

君「そろそろハッキリさせておこうか」

シ「私たちのパワーバランス？　実に対等だと思うけど」

君「どうも俺の方が虐げられてる感じが否めないんだが？」

シ「うーん、でも君には似合うからなあ」

君「なにが？」

シ「虐められ顔」

君「炎上するぞ！」

攻守逆転

シ「君はMみが出てる時だけ良い顔してるからね」

君「Mみってなに……じゃあお前は逆にSだと？」

シ「まあ、君のことを雑に扱ってるという意味ではね」

君「けどいつだったか、前に俺が敵に誘拐された時は、シエスタお前、血相変えて飛び出してきて……痛い痛い痛い！　分かった、嘘！　そんな過去はなかった！　な！」

仕事

潜入捜査

シ「ホシは隣の部屋にいる。証拠を掴むまで持久戦だよ」

君「そのために俺たちは同棲中のカップルを装うと。やれ、それらしいフリはしないとな」

シ「だね。とりあえずドン・キホーテで一番頭の悪そうな下着を買ってベランダに干しておこう」

君「同棲カップルへの偏見がひどい」

暇つぶし

君「ホシが動くまで暇だな」
シ「十回クイズでもやってようか」
君「緊張感ゼロか」
シ「十回まわってワンって吠えて」
君「十回クイズの意味知ってるか？」
シ「まあいいから」
君「……ワン」
シ「よしよーし（わしゃわしゃ）」

迷子猫

君「次の仕事は脱走したペットの捜索か」

シ「捕獲用のネットは持った？」

君「ああ、任せろ」

シ「あとはゲージと食器。ベッドにトイレ。爪とぎ、ネズミのおもちゃ、CIAOチュール、それから……」

君「人の猫を飼おうとするな」

シ「にゃー」

君「猫語で抵抗するな。キャラを守れ」

ペット

君「シエスタって、猫好きだったか？」

シ「寝るときに、こう、もふりたいと思ってね」

君「それが目的か……。けどこんな流浪の旅してる限り、ペットを飼うなんて無理だろ」

シ「え？　ペットならもう飼ってるけど？」

君「なぜそこで俺を指さす？」

依頼

君「今まで受けた依頼の中で、特に印象に残ってるものってあるか？」

シ「うーん、結婚式のレンタル出席かな。参列者が少ない場合に、恥をかかないためにサクラを用意する人が増えてるみたい」

君「それ、探偵の仕事か？」

シ「しかも私は、依頼人の花嫁役だった」

君「ホラー過ぎる……」

給料

シ「今月もよく働いてくれたね、はい」

君「分厚い封筒……！」

シ「ぜんぶ肩叩き券だけど」

君「労い方を間違っている……」

シ「いや、これは君をクビにするときに使おうかと」

君「しかもそっちの肩叩き？？？」

飴と鞭

シ「にしても最近君は真面目だね。出会った頃は、どんな仕事も嫌がってばかりだったのに」

君「慣れだな。めちゃくちゃ嫌な慣れ」

シ「よく調教されたものだね」

君「お前がそれ言う？」

シ「君の場合は鞭だけでいいからとても楽」

君「だから人に変なキャラを植え付けるな！」

茶番

君「言っておくが、俺は褒められた方が伸びるタイプだからな」

シ「初耳だね」

君「だからシエスタはもっと、俺を甘やかすといい」

シ「よしよし、偉いね。頭を撫でてあげよう。抱きしめてあげよう。こら、どこ行くの。ぎゅーってしてあげるから早くこっちに……」

君「そこまでは言っていない！」

気安さ

君「シエスタ、お前たまに気安い感じを出し過ぎなところあるぞ」

シ「抱きしめてあげる、とか言っちゃうところ？」

君「それだよ。あんまりそういう感じを出すと、こう、よその変な男が寄って来かねんというかだな。あとはワンピースの丈も少し短か……」

シ「君は私の彼氏か」

関係性

シ「君は、私のなんなんだろうね」

君「さあな。それを言うなら、お前は俺のなんなんだよ」

シ「さあね。恋人でもなければ、友だちでもない、そんな私たちの関係は――」

君「関係は？」

シ「……他人？」

君「せめてビジネスパートナーで手を打とうか？？？」

日常

パートナー

シ「仕事と私、どっちが大事？」

君「面倒くさい彼女か」

シ「ただの思考ゲームだよ、ほら答えて」

君「……お前だよ」

シ「……その心は」

君「シエスタは俺のビジネスパートナーだからな」

シ「うまいこと逃げられた」

彼女

シ「君は彼女とか作らないの？」

君「高校にも通わず世界を放浪中の俺に酷な質問をするな」

シ「確かに君は二日会わないと忘れる顔をしてるけど、変な魅力は持ってるよ」

君「今の一文、ひとつも俺を褒めてないが？」

シ「あと、なんか、たまにおもしろい」

君「飽きるな！」

ラブコメ

シ「君に彼女を作る術を授けてあげよう」

君「急にハウツーラブコメみたいな展開になった」

シ「無理やり名探偵の助手にされた俺が、いつの間にか学園中の美少女たちから依頼（こくはく）を受けるようになってしまったんだが？」

君「ジャンルが変わった！」

シ「名探偵から恋愛指南を受ける正統派学園ラブコメだよ」

君「新しすぎる」

恋愛指南

シ「まず君は、無愛想すぎる。加えて、捻くれていて。トドメに、神経質と来た」

君「わお、令和の逆三冠王だな」

シ「ついでにジョークがつまらない」

君「盗塁王で四冠達成」

シ「そんな君に、逆転の一手を授けよう」

君「監督……！」

シ「その答えは――次話でね」

笑顔

シ「君に足りないのは、ずばり笑顔だよ」

君「はっ、無謀なことを」

シ「なんで得意げなのさ」

君「俺が満面の笑みを浮かべたとこを想像してみろ……どうなる？」

シ「……ふふ、笑えてきた。確かにめちゃくちゃホラーだ……やめて笑う……」

君「流石にそこまで笑われると傷つくんだが？」

本物

シ「私が代わりに、本物の笑顔ってのを見せてあげよう」

君「（シエスタはそう言うと、両方の人差し指を使って、いたずらっぽく自らの口角をキュッと上げてみせた。いつものクールな表情とは一転、そのどこか子供っぽい仕草が生み出すギャップは新鮮で――）」

シ「なんで私の笑顔だけそんなに細かく描写するの？」

もしも

君「やっぱり彼女なんていらないな」

シ「へえ、どうして？」

君「今はお前の相手をするので精いっぱいだからな」

シ「……じゃあ、もし私がいなくなった後は？」

君「……さあ、な」

シ「……」

君「……暗い雰囲気になったから罰ゲームな」

シ「はいはい分かったよ、裸エプロンだよね」

看病

シ「お風呂には入れないだろうから、せめて身体拭いてあげるよ」

君「いい。自分でやる」

シ「まあまあ、風邪の時ぐらい甘えなよ」

君「……分かったよ。だが、せめて服ぐらいは自分で脱g……」

シ「じゃあ私は下を手伝うね。よいしょ……っ」

君「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!」

脱衣

君「躊躇いなく男のズボンをずりさげるな！」

シ「ごめんごめん、まさか嫌がるとは」

君「まさか嫌がらないとでも思ったのか？」

シ「大丈夫。大きさで男の価値は決まらないよ」

君「そんなコンプレックスは抱いていない！」

シ「……いや、やっぱり君の場合はさすがに少し気にした方が良いかも」

君「～～～～っ!!!　（声にならない怒り）」

喧嘩

君「あー、完全にキレた。二度と口効かねえからな」
シ「へえ、いいよ。じゃあパートナー解消だね」
君「……」
シ「……」
君「……」
シ「……」
君「……それはどうだろうな」
シ「……それはどうだろうね」

夢の国

和解

シ「特定の人と喧嘩をせずに済む方法を発明した」

君「ほう」

シ「喧嘩をするとお互いに不利益が生じるようなルールを作っておくんだよ」

君「なるほど。そうすると嫌でも喧嘩ができなくなると」

シ「うん。たとえば私たちの場合、喧嘩をしたら私は君に肩を揉まれてしまうとか」

提案

シ「喧嘩をしてしまったら、翌日にデ〇ズニーランドに行くって決めるのはどう？」

君「あー、気まずい思いをしたくないから自然と仲直りしたくなると」

シ「君なんか、私の助手に相応しくないんだからね」

君「急造のキャラで喧嘩をふっかけられた」

シ「勘違いしないでよね」

君「さてはデ〇ズニー行こうとしてるな？」

夢の国

君「ほんとに来てしまったな……」

シ「たまにはいいじゃない。何から乗る？」

君「いや、アトラクションに乗るより先に、買うものがあるだろ」

シ「え、急にやる気になった」

君「ほら、耳を買いに行くぞ。耳」

シ「……君そんなキャラだっけ？」

君「あっ、ドナルドだ！　急げ、写真撮って貰うぞ！」

シ「ものすごく楽しみ始めてる……」

ギャップ

君「ファストパスを使える時間までもう一か所回っておくぞ。大丈夫、今の時間帯はパレードをやってるから、アトラクション自体は空いて……お、向こうでチュロス売ってるな。ちょっと買ってくる」

シ「恐らくは、普段クールな私のギャップを見せるために用意されたイベントの見せ場を、なんで君が持ってくの？」

待機列

シ「テーマパークでは、いかに女の子を退屈させないかが大事だよ」

君「タワーオブテラーの高さが59mの理由だが、日本では60m以上の建物に航空障害灯を設置する義務があってだな。つまりは景観を壊さないためにー」

シ「頼んでもない雑学を聞かされる」

君「ん。チュロス美味いな、シエスタも食うか？」

シ「……君が楽しそうならいいか」

絶叫マシン

君「……怖くなってきた」

シ「バカか、君は」

君「え、なんでこんなのに並んだんだっけ……」

シ「君がそれを言うの？」

君「手繋いでいい？」

シ「女子か」

君「冷たい……」

シ「だから女子かって」

パレード

シ「これが終わったら夢の国ともさよならだね」

君「ああ、それなりに楽しめたな。まあ絶叫系は少し緩かったが」

シ「……君がなんか私に必死にしがみついてる写真、撮られてるからね？」

君「……ほら花火上がるぞ」

シ「はいはい」

君「綺麗だな」

シ「私が？」

帰り道

君「いつの間にか写真フォルダが夢の国だらけだな……」

シ「君のテンションが壊れてたの今でも笑う」

君「お前も耳カチューシャつけてピースして映ってるが？」

シ「……なんのことかな」

君「これは満足げに、首からポップコーンバケットをぶら下げているシエスタ」

シ「……君が私をいじるのは禁止だから」

お土産

シ「そういうこと言ってくるなら、もう君とは行かないから」

君「はいはい、大体俺たちはそういう仲でもキャラでもないしな」

シ「だね、今回のは特例。明日からはいつも通りだよ」

君「ああ、明日からな」

シ「そう、明日から。……だから」

君「……今日の所は、お土産をだな」

シ「あ、私クランチチョコ食べたい」

君「帰ったらお菓子パーティーだな」

密着24時

君「部屋に置かれたあのカメラは一体？」

シ「取材だよ。名探偵の一日に密着したいんだってさ」

君「自分で撮影するのか？」

シ「うん、人に付きまとわられるのは苦手だからね」

君「その割に俺とは常に一緒だが平気なのか？」

シ「……君は、まあ、その……うるさいな」

君「理不尽だ」

理想

シ「明日の朝からカメラを回すけど、いつも通りの感じでお願いね」

君「了解。起きたら颯爽とシャワーを浴び、モーニングを食べながら英字新聞に目を通し、寝坊したお前を優しく起こしてやる、と」

シ「君の助けなんていらないよ。私だっていつも通り六時に起きて紅茶を淹れて、小鳥のさえずりを聞きながら優雅に読書をするんだから」

現実

君「おいシエスタ！　いつまで寝てる！」

シ「ん～……朝？」

君「昼だ！　なんなら夕方よりの昼だ！」

シ「またまた。だって、朝六時にアラームセットしたんだよ？」

君「……ここに無残にも破壊された目覚まし時計が落ちている」

シ「そんな、まさか……強盗？」

君「……その赤くなった手の甲を見せてみろ」

泥仕合

シ「くっ、また私の左手が勝手に……」

君「謎の中二病キャラで誤魔化すな」

シ「……君だって寝坊したくせに。優雅なモーニングはどこにいったの？」

君「小鳥のさえずりをBGMに読書するメルヘン少女も行方不明だな」

シ「……っ、……っ」

君「え、普通に殴ってくる……普通に殴ってくる！」

阿吽

シ「急いで準備するよ」

君「あれ靴下どこだっけか」

シ「タンスの二段目。あと着替えるからあっち向いてて」

君「へいへい。あー、珈琲だけ飲んでくか？」

シ「うーん、紅茶かな。あ、タイツ破れてる」

君「ん、買ってくる。その間に茶淹れといてくれ」

シ「よし、もう今日は遅刻してお茶にしよう」

解決

シ「さて、今回も無事に依頼を解決できたね」

君「肝心な事件内容を全部すっ飛ばしたが」

シ「探偵だからって推理を披露しないとダメなわけじゃないよ」

君「もはや俺らにミステリは求められていないか……」

シ「だね。さあ、帰ってきたことだし始めるよ――ラブコメを」

君「ラブコメを!?」

詐欺

君「……名探偵密着二四時はどこにいった？」

シ「だって私達の本当の仕事は放送できないでしょ？」

君「あー、アレを大っぴらにはできないか」

シ「だから尺を稼ぐよ――お風呂シーンで」

君「シエスタの？　需要あるか？」

シ「……喧嘩を売ってる？」

君「次回『お風呂篇』、乞うご期待」

お風呂

シ「お湯加減はどう？」

君「まさかの俺の風呂シーンだった……」

シ「意外と君も筋肉ついてきたね」

君「……胸板を指でつつくな。あとカメラを下ろせ」

シ「頭を洗ってあげようか」

君「いや、その恰好じゃ濡れるだろ」

シ「よし、じゃあ次回『バスタオル篇』」

君「……へー」

バスタオル

シ「痒いとこは？」

君「それより俺の目にまでタオルが巻かれるとは……」

シ「バカか、君は。私の身体はそんなに安くないよ」

君「バスタオル巻いてるんだったら良くないか？」

シ「え、巻いてないけど？」

君「え」

シ「え」

君「あ、なんか目が痒い。一旦タオルを」

夜食

シ「今日はお金が入ったからね、豪勢にピザだよ」
君「この時間にそんなに食ったら太るぞ」
シ「でも、抱き心地良くなるよ？」
君「そもそも抱きしめる機会がない」
シ「うーん、じゃあ試しに――」
君「……あー、ネトフリで観たい映画があるんだった」
シ「はいはい、知ってる知ってる」

就寝

シ「さて、今日はもう寝るよ」

君「結局、撮れ高ゼロだったな……」

シ「でも平和が一番じゃない？」

君「まあ、な。毎日布団で眠れるわけでもないし」

シ「だね。……にしても、今日は少し冷えるね」

君「……そうだな」

シ「……」

君「……」

おまけ　シュレディンガーの猫

シ「月が綺麗だね」

君「……！　……あー、ん、そう……だな？」

シ「ちなみに夏目漱石が『アイラブユー』をそう訳したという話は、はっきり記録にも残っていなくて、真実か嘘かは分からないんだって」

君「……そうかよ」

シ「うん」

君「……」

シ「月が綺麗だね」

とある名探偵と助手のラブコメ的日常@『探偵はもう、死んでいる。』

イベント編

クリスマス①

君「夕飯の買い出し行ってきたぞ」

シ「あれ、随分豪勢だね」

君「あー、……たまたま？　チキンとケーキが安くてな？」

シ「ああ、そういえば今日はイブか。まったく君も子どもだね、そんなイベントではしゃぐなんて」

君「……朝からずっと三角帽子を被ってるやつがよく言うな？」

クリスマス②

君「そんなに楽しみにしてたのか、クリスマス」

シ「……誰だって多少はそうだと思うけど。昔は君もクリスマスパーティとかやってきたでしょ？」

君「パー……ティ……？」

シ「え、友だちとかと」

君「トモ……ダチ……？」

シ「……ごめんごめん、今日はこれまでの分楽しもうね」

クリスマス③

君「次シエスタの番な、どうだジャック三枚だぞ！」

シ「二人大富豪でこんなに楽しそうにしてる人を初めて見た……」

君「はっは。俺の残った札は絵札ばかりだからな、これで俺の勝ち――」

シ「とは言え勝たせないけど。エース三枚」

君「……」

シ「流れて、七の革命」

君「……」

クリスマス④

君「はー、寝よ寝よ」

シ「いじけ方が子供」

君「お前も早く寝ないとサンタさん来ないぞ」

シ「だから君は子供か」

君「枕元にでっかい靴下用意してるやつがよく言うな？」

シ「……私は今年一年良い子だったから。一応……」

君「良い子は助手をこき使わないんだよな……」

クリスマス⑤

シ「助手、ねえ起きて」

君「……んー、どうした」

シ「靴下にお菓子が入ってる……」

君「おー、サンタが来たんだな」

シ「そんなわけ。戸締りしてるし、仮に誰かが入ってきても私が気づかないわけないし……。……あ」

君「どうかしたか？」

シ「……バカか、君は」

大晦日①

シ「今年も終わりだね」

君「あっという間だったな」

シ「なにか思い出語ってみてよ」

君「そうだなあ……銀行強盗を捕まえるために人質役を演じたこととか」

シ「それは災難だったね」

君「お前の指示だ」

シ「その後ちゃんと助けに来たでしょ」

大晦日②

君「あと、宙に浮かぶ鉄骨の上に立たされて命を懸けたマネーゲームをやらされた」

シ「あー、その時は私も捕まってたからね」

君「最後は二人で仮面を被った主催者に挑んだんだっけ」

シ「『これはお前たちの絆が試される死のクイズだ』とか言って高笑いしてたけど、結局私たち一問も間違えなかったね」

君「なんだったんだろうな、あれ」

大晦日③

君「逆にシエスタの思い出は？」

シ「うーん、君とタピオカを飲んだり」

君「いきなりエピソードが薄い」

シ「君の寝顔にえげつない落書きをしたり」

君「今明かされた真実」

シ「君と夜中にB級アクション映画を観たりした事かな」

君「……もっと敵と戦った話とかしないか？」

大晦日④

君「なんで俺とのエピソードばっかなんだ」
シ「君だって私との思い出ばかりのくせに」
君「……ノーコメント」
シ「来年はどうなるかな」
君「そんなに変わらんだろ」
シ「願望？」
君「……ノーコメント」
シ「私は」

大晦日⑤

君「……またお別れか」

シ「死んでしまっている私は、本来ここにいちゃダメだからね」

君「特別出演ってわけにもいかないか」

シ「タイトル詐欺だって怒られちゃうからね」

君「……だったらタイトルを変えれば」

シ「小声で妙な画策をしない」

君「ジョークだ。……じゃ」

シ「うん――ばいばい」

賀正

シ「というわけで、明けましておめでとう」

君「湿っぽい感じで消えていく流れと思ったら！」

シ「様式美だからね。じゃ、早速行くよ」

君「？　どこに？」

シ「富士山。ご来光拝むでしょ？」

君「初心者がこの時期に登れるか！」

シ「あ、みんなも今年もよろしくね」

君「急にカクヨム目線」

バレンタイン①

君「……」

シ「どうしたの、今日一日ずっとソワソワしてるみたいだけど」

君「……別に？　気のせいだろ」

シ「そう、ならいいけど」

君「とは言えシエスタ。一応訊くが、さっきから何を作ってるんだ？　まさか……」

シ「え、カレーだけど」

君「カレーだった……」

バレンタイン②

シ「どうしたの？　別のものでも期待してた？」

君「……そんなベタなこと言ってたまるか」

シ「まあ私達にそういう展開は似合わないからね。じゃ、ご飯にするよ」

君「にしてもカレーか。さっきトイレ行った時にちょうど食べたくなったんだよな」

シ「最悪なタイミングで食べたくならないで」

バレンタイン③

シ「味、どう？」

君「ん？　あー、うん」

シ「……私は味を聞いてるんだけど」

君「え？　ああ、普通に美味いが」

シ「はあ」

君「ゴミを見るようなジト目」

シ「君は将来お嫁さんに『今日は何が食べたい？』って訊かれて『なんでもいい』って答えるタイプの最悪な夫になるね」

バレンタイン④

君「急な罵倒を受けた」

シ「……今のは君が悪いから」

君「そうかよ。……ん？」

シ「どうかした？」

君「よく考えると今日のカレー、いつもよりコクがあるような？」

シ「……」

君「なにか隠し味でも入れてんのか？」

シ「……はあ。バカか、君は」

ホワイトデー①

シ「ただいま……って、なに？　この部屋中に積まれたお菓子の山は」

君「帰ったか。いや、まあなんだ。お菓子パーティを開催しようと思って？」

シ「お菓子パーティ」

君「……お菓子の家を作ってもいい」

シ「私にホワイトデーのお菓子をあげるためのカモフラージュ下手すぎない？」

ホワイトデー②

シ「こんなに照れ隠しが下手な人間を初めて見た」

君「……なんのことか分からんな」

シ「ふふ」

君「笑うなこら」

シ「なんだかんだ君は私に甘いね」

君「俺は誰に対しても優しいだけだ」

シ「でもその優しさが、いつか君自身に牙を剥くよ」

君「こんなとこで謎伏線を貼るな！」

ホワイトデー③

シ「ところで本命は？」

君「……質問の意味が分からんな」

シ「私は、君の、本命が、知りたいな」

君「っ、ノーコメントだ！　俺が誰をどう思ってるかなんてどうでもいいだろ！」

シ「え？　私はこのお菓子の山の中で、どれが本命のお菓子かを聞いただけなんだけど」

君「騙されたッ！」

ホワイトデー④

君「……そこにあるマカロンだ、マカロン」

シ「これか。美味しそう」

君「……義理は果たしたからな。俺はもう寝る」

シ「一緒に食べないの？」

君「食べない」

シ「紅茶も淹れるよ？」

君「いらない」

シ「私のこと嫌い？」

ホワイトデー⑤

シ「ほら、機嫌直して。お菓子を食べよう」

君「……次はないからな」

シ「でも実は君もからかわれ待ちしてない？」

君「心外だ！」

シ「ところで――マカロン、ありがとう」

君「……反則だ」

シ「一回素直になったから、そろそろからかってもいい？」

君「……理不尽だ」

誕生日①

君「シエスタ、これ」

シ「何、この大きな袋？」

君「誕生日プレゼントだ」

シ「……」

君「どうした？」

シ「いつになく素直だなと思って。いつもの君だったら『シ、シエスタ、そ、そそその、わ、わ、渡したいものが……』ってなるのに」

君「誰だそれは！　似てない物真似はやめろ！」

誕生日②

君「俺も男だ、プレゼントぐらいスマートに渡せる」

シ「へえ、ところで私の誕生日っていつだっけ？」

君「四月だな」

シ「うん。それで今って何月だっけ？」

君「……六月だな」

シ「二ヶ月間のシミュレーションお疲れ様。ずっと鏡の前で渡す練習してたね」

君「気づいてたなら言え！」

誕生日③

シ「開けていい？」

君「ああ」

シ「わ、任○堂スイッ○だ。品切れ続いてたんじゃなかったっけ」

君「二四時間ネットに張り付いてたら買えた」

シ「実に君っぽい」

君「それより何をやる？　ス○ブラにマ○カにあ○森に……心配するな、プロコンもある」

シ「私より楽しもうとしてない？」

誕生日④

君「くっ、待てシエスタ！　話せば分かるはずだ！」
シ「悪いけどゲームとは言え手は抜かないから」
君「……また負けた」
シ「これで私の三〇連勝」
君「というかもう五時間ぶっ通しでやってるのか」
シ「いいんだよ――ゲームは時に人を救うんだから」
君「……いや全然締まらないが？」

誕生日⑤

君「結局、誕生日はゲームだけで終わったな」

シ「本当は誕生日じゃないけどね」

君「……まあ来年は善処する」

シ「来年も私と過ごすって決まってるの？」

君「ま、決まってるんじゃないか？」

シ「……そっか。決まってるんだ」

君「ああ、仕方ない」

シ「うん。じゃあ仕方ないね」

七夕①

シ「笹の葉を持ってきたから短冊を書こう」

君「やたら立派だな」

シ「こういうイベント事は大事にしていかないとね」

君「意外とミーハー」

シ「そうやってなんでも斜に構えて自分だけはみんなと違うし特別だみたいなスタンスを取ってるから友達ができないんじゃない？」

君「……お前は俺を泣かせる気か？」

七夕②

シ「ごめんごめん、ほら一緒に短冊書こう？　クレヨン貸したげるから」

君「……世界がもう少し俺に優しくなりますように」

シ「切実すぎて面白い」

君「シエスタと俺の立場がいつか逆転しますように」

シ「？　永遠にこないよ？」

君「永遠にこないのかよ真顔で首をかしげるなよ」

七夕③

君「そういうシエスタは何を書いたんだ？」

シ「私は君と違って見せて恥ずかしいものじゃないよ」

君「どれどれ？　……無病息災か、普通だな」

シ「残念、私の弱味を握りたかったんだろうけど」

君「一応、短冊を火で炙ってみるか。何か隠しメッセージがあるかもしれない」

シ「……」

君「いや水に浸してみるか」

七夕④

君「お、文字が浮かび上がってきたな。やっぱり本当の願い事はここに隠してたか」

シ「っ、返して」

君「ええと？　私の大切な――」

シ「……返して」

君「……あー、水で滲みすぎててこれ以上見えないな」

シ「……バカか、君は」

七夕⑤

君「来年も平和に短冊を書けるといいな」

シ「そうだね、それが一番の願いかも」

君「じゃあ今日は寿司でも食うか」

シ「それ七夕関係ある？」

君「年に一度のイベントの日は好きなものを食べていいんだよ」

シ「君もイベント大好きだね」

君「今日はアイスも一人二個までいい」

シ「神」